

欧州ロシア中央部の園芸愛好家によるハナショウブの環境順化の試み

KAULEN M. E (カウレン) 著 関根 秀人 訳

この論文は、ロシア欧州部におけるハナショウブの環境順化に関するもので、この分野における筆者自身の試みの結果を内容としている。はじめに申し上げたいのは、筆者が過去にも現在も強調していることだが、ロシアでこの素晴らしい花がその道のプロや大手の花卉業者だけでなく、今日数十万人にのぼる園芸愛好家が栽培できるようなものにしなければならないということである。

概して、かかる園芸愛好家とは、大都市で働き、生活のペースをおいている人々である。そのような園芸愛好家が郊外にもつ土地は、大部分は 600 m²~1500 m²、肥沃でなく、ポドゾール性の土壌の地域に位置しており、園芸愛好家の多くは週末だけ訪れ、平日は水遣りできず、寒いときには覆いを施すことができない人々である。特定の品種に必要な複雑な園芸手法ゆえに、その栽培を不可能にさせている。ゆえに手間がいらず、あいにくの条件にも安定していて、毎年必ず開花がみられるということが、ロシアの園芸愛好家が求める園芸植物の必須の特徴といえる。

日本のイリスの園芸種はロシアの庭では長い間、欧州地域ロシアの南部（スフミの植物園[訳者注：グルジアと領土係争の対象となっているアプハジア共和国にある黒海沿岸の都市]）や

極東（すなわち、もともと気候条件が適している地域）において栽培されてきたが、ロシア中央部では事実上、今日までほとんど知られていない。ロシアの園芸家の間でハナショウブは従来から手間のかかる、栽培が困難で、ロシア中部の条件には適さないものと考えられてきている。



筆者とモスクワ郊外の庭

その主な原因は、ハナショウブの生まれ故郷の気候とロシア中央部の気候が非常に異なっていることである。5月半ば、6月初旬にときとしてマイナス7度といった氷点下になることもある。そのようなときには、ロシアで（イリスとしては）もっとも人気の高いジャーマンアイリスの蕾を台無しにしてしまうこともしばしばあり、ちなみにそれがゆえに数多くの外国品種の開花期間にはっきりとした差が出てくるのである。しかし、モスクワ郊外におけるハナショウブの生育はジャーマンアイリスより二週間ほど遅く始まり、それがゆえに開花条件を守って

いるともいえる。（筆者はハナショウブの冬期の覆いを急いで外さず、人工的にその生育開始を遅らせるようにしている。）

近年、冬の天候はとても不安定で、思いもよらぬことがしばしば発生している。たとえば、長い間、雪が降らず吹きざらしになったり、激しい気温の上下変化が繰り返されたり、マイナス 30 度以下の厳寒（1月後半に多い）が訪れたりする。遅くはじまる夏[訳者注：ロシア中央部では 4 月まで比較的寒く、5 月になって春を越して一気に夏になるような気候が特徴]と早く訪れる秋の寒さは、ハナショウブの活発な生育期間を短縮させてしまう。ロジオネンコ博士は、ロシア中央部におけるハナショウブの環境順化に影響する温度の要件の中でもっともネガティブな影響を与えるのは、年間を通じてプラスの気温の合計が不十分なことだと指摘している。モスクワ州での 10 度以上の気温の合計は 1875~2055 に過ぎない（出典：セレブリャニコヴァ筆、ロシア中央部の気候 ロシア・アイリス協会 2010 年度年報 60 頁）。しかしながら、夏といっても極端に気温が高く、湿度が低いこともある。たとえば、2010 年の夏は、6 月半ばから 8 月初旬にかけ、モスクワ郊外南部では降雨がまったく無く、湿度は 30%以下、日中の最高気温は平均で摂氏 28~

32度で、41度に達することもあった。これらすべてのファクターはハナショウブの環境順化を困難にしている。

I. Ensata のロシアにおける栽培の初めての試みは、レーゲル（1815～1892年）によって手がけられた。当時の首都サンクト・ペテルブルグで、レーゲルが園長を務めた果実園で、19世紀後半にさまざまな園芸植物の試験栽培が行われ、ハナショウブの園芸種もドイツからサンクト・ペテルブルグに持ち込まれたのである。しかし、19世紀、ロシア帝国の北西部で安定した生育と開花をみることはなく、もちこまれたハナショウブは凍死。唯一、中国東部で採集した野生の *I. Ensata* の実生だけが育つことができた。

ロシアにおけるイリスの権威であるロジオネンコ博士は36年にわたり様々な日本のハナショウブをレニングラード植物園で栽培しようと試みたが、成果は芳しくなかった（出典：ロジオネンコ著『*Iris Kempfer*』1958年VI/6号 320～327頁、ロジオネンコ著『*Iris*』2002年139頁）。しかし、ロジオネンコ博士は一度だけ日本のハナショウブが開花したときに、ウラジオストク近郊育ちのノハナショウブと交配し、冬の気候にも耐えうる品種をいくつか生み出すことに成功した。なお、モスクワ中央植物園における1980年代のハナショウブの栽培の試みは失敗に終わった。

ロシア中央部におけるハナショウブの栽培を初めて本格的に試みたのは、モスクワ大学のノ

シロフ教授である。1930年代にフランスから日本のハナショウブの苗を入手し、モスクワ郊外の自らの庭で栽培を開始したのである。ノシロフ教授は園芸技術を研究し、ロシア中央部においてハナショウブを栽培するには、あまり肥沃でない粘土と砂の混ざった土壌、盛り土への植え付け、生育期とくに開花期の十分な水遣り、ホウ酸と過マンガン酸を加えつつ、リンとカリウムを2週間に一度の施肥、冬越しのための覆いを施すことが必要と結論づけた。ロジオネンコ博士がいうには、この試みはある年にはかなり成功に終わり、ノシロフ教授はたわわに咲くハナショウブをみたそうだ。



筆者の庭の花菖蒲

1960年代、70年代にかけてモスクワ郊外でハナショウブを栽培したのはパリヴェレフ Pal'velev V.T.氏で、彼はモスクワ郊外でもハナショウブを栽培し、たくさんの花をつけることは十分可能であると考えていた。パリヴェレフ氏の栽培のコツとして、縁を高く盛った日当たりのよい花壇の内側のくぼんだ箇所植え付けること、生育期間に日光で温まった水をたっぷり与え、複合肥料を与えること、堆肥でマルチングを施すことを挙げている。ノシロフ博士と同

様、パリヴェレフ氏も砂を混ぜた粘土質のあまり肥沃でない土壌を推奨しており、モスクワ郊外の条件の芳しからぬファクターとして、鉍物塩の含有量が多すぎ、悪影響をもたらしていると強調している（出典：雑誌『*TSVETOVODSTVO*』1973年、9号）。

しかし、こうした試みは当時それだけで、花卉園芸家の間で栽培してみたいという関心にはつながらなかった。今日、モスクワ郊外の園芸愛好家のコレクションでも未だにハナショウブは稀な類である。今日、イリスに対する関心が高まる中、ハナショウブをロシア中央部で栽培しようという活発な試みがなされている。この多くの困難をとまなう道で主に尽力してきた、そして現在もしているのは、園芸愛好家らである。今日、欧州地域ロシアのイリス愛好家の大半は次の二つの組織に所属してまとまりを成している。そのひとつは、1992年に発足し、現在ではモスクワ、クラスノダール、タガンログなどのいくつかの地域支部をもち、2009年末現在で167名の会員をもつロシア・アイリス協会。もうひとつ、ゲッテンベルガー Gettenberger P.G.氏の提唱で1962年に発足した「モスクワ園芸家クラブ」のアイリス部がある。

われわれイリスを栽培する者にとってハナショウブの最たる魅力のひとつは、その開花時期である。ハナショウブは、現在ロシアでとても人気が高いものの6月末には咲き終わり愛好家をつらきさせるジャーマン・

アイリスの次に咲き始める。ハナショウブの開花時期は、それぞれの品種、日あたりのよい屋外か半日陰に植えているか、夏の気象条件などに大きく影響を受け、良好な条件の年には私の庭では7月いっぱい花が咲くが、8月じゅう、日陰に育つものでは9月初旬まで咲いていることもある。

ハナショウブのロシア中央部においてハナショウブの栽培を普及させるにはいくつかの方法があり、それぞれお互いに補完しあっている。

第一に、ロシアの条件下で一番の安定性を示す、かつて外国で品種改良されたものを選別すること。残念ながら、今日のロシア市場には外来の苗があふれ、さまざまなサプライヤーを惑わしている。蜻蛉のような短命な会社は自社の評判はおろか、購買者や買われる花のことなど気にかけてたりしない。苗は本来販売される時期でなくとも売りに出され、正しくない条件で保管され、品種の混同が蔓延している。品種試験あるいはロシアの条件に適應しうるであろう品種の選別など語るに至らない。自分自身、花屋で手に入れたハナショウブでやっとこ生き延びている株を4年育てているが、いままで一度も開花したことなく、手入れをよくしても、葉が黄色がかりくすんだ色をして元気なく垂れ、きわめてみすぼらしい。私がその苗を捨てずにいるのは、ひょっとするとあるとき開花するかもしれないと思うからである。またやはり花屋で買い付けた、見栄えのする品種 **Edance**

Paintbrush には余りたくさん花茎は現れないが(2、3本)、毎年安定して咲いてくれる。それゆえ、このような方法で手に入れるのは宝くじを当てるがごときで、残念ながら、園芸の初心者も多くはパッケージの写真、インターネットや雑誌の広告に魅惑されて手に入れるものの、がっかりする結果となり、ハナショウブはロシア中央部には向かないとする意見に加担するのである。

今日海外品種のハナショウブがロシア中央部においてうまく栽培できていることがたまに印刷されているのを目にする。筆者の経験からすれば、そのような情報には用心せざるをえず、一種の懐疑心を呼び起こす。海外の品種には1、2年目は(3、4年目は稀に)安定した成長をみせ、そこそこ花をつけるが、3、4年目には花をつけなくなるか、元気なく、毎年咲かなくなるようになり、株そのものが何年にもわたりただ生き延びているだけ、あるいは病気になったり、枯死してしまうこともある。ゆえにモスクワ周辺地域での品種の安定度は4、5年観察しなければならない。

今日ごくわずかのモスクワ地域における愛好家によって栽培されている品種をいくつかのグループに分けることができる。文献や筆者の個人的なコンタクトから得られた情報によれば、ロシア北西部のレニングラード(現在のサンクト・ペテルブルグ)のロジオネンコ博士が品種改良したものがもっとも多い。ヴァシーリィ・アルフェーロフ

Vasily Alferov、アルタイ **Altai**、デルス・ウザーラ **Dersu Uzala**、チャイカ **Chaika** ほか。これらの品種は、ハナショウブとノハナショウブを掛け合わせた結果生まれたもので、越冬しやすい。極東のミローノヴァ氏の手による品種には、シレーニェヴァヤ・ディムカ **Sirenevaya Dymka**、プリモーリエ **Primor'e**、ローザヴォエ・オブラコ **Rozavoe Oblako** ほかがある。過去にロシア中央部でも見られたいくつかの古い海外品種、たとえば、大淀、雪千鳥、白玉楼(日本)、**Patrocle** (仏)に加え、最近では豪州や米国の品種、**Janet Hatchinson**、**Dural Peacock**、**Summer Storm** ほかが入ってきた。園芸技術の向上により、モスクワ郊外の愛好家もハナショウブの生命力を高め、花を咲かせることができるようになった。しかし、海外の品種はロシアの品種にくらべ、たいへん活きがよくなく、花つきも悪く、しばしば枯死してしまう。ロシアのイリス専門家の大家のひとりであるミローノヴァ氏によってその多くが生み出された極東の品種(**Primor'e**、**Rozovoe Oblako**、**Sirenevaya Dymka** ほか)は際立った美しさで抜き出でている。残念ながら、暖かく湿度の高い沿海地方生まれの品種は、海外品種にくらべより安定しているとはいえ、生まれ故郷の極東でみせる栽培の簡易度と見栄えの良さはロシア中央部では得られない。

ハナショウブの普及のための二つ目の方向性は、(欧州)ロシア中央部で生育し開花を確保

する園芸技術の模索と習熟である。ハナショウブの栽培を難しくしている主な要素として、年間のプラスの気温の合計が不足していること、水遣りに気を使うこと、土壌に配慮が必要（とくにカルシウムに弱い）なことを想起しよう。

ハナショウブの安定した生育と開花を確保する園芸技術を模索するなかで、ロシアのイリス専門家たちはさまざまな方法を試した。鉢植えにして、株の生育期と開花期には水中に沈め、冬は屋内に移動させ、植え付けの北側に丸太の壁を設け寒い風から守るなど。しかし、これだけ容易でない園芸技術を要するものは、幅広いアマチュア園芸には適さない。

ハナショウブの露地栽培にあたっては以下の一連の条件を守る必要がある。

ロシアの中央部、北部におけるハナショウブの植え付けは、若い株が厳しい試練となる冬越しにむけ準備するため、9月半ばまでに終わらせるのが望ましい。

多くの欧州諸国や米国では土壌がアルカリ性になりがちで、ハナショウブの栽培の妨げとなっているが、ロシア中央部の酸性がちな土壌ではハナショウブの栽培を容易にしている。土壌に腐葉土あるいは堆肥を加え、鉬物肥料をたくさん与えないことである。

ハナショウブが植えてある畝を土壌のレベルより5、6センチ高くした通水性のない壁で囲むこともあり、そのような「桶状の花壇」は必要となき十分に

な水分を経済的に施すことができる。生育期には複合鉬物肥料を2、3回施肥し、十分な栄養素、とくに鉄分が行き届いているかに注意を払う。

ハナショウブは、エピンEPIN[訳者注：エピブラシノライドを含有]、ツィルコンTSIRKON[訳者注：植物の抵抗力向上を目的とする液体]、鉄キレートキレートの混合剤を定期的に噴霧するととてもよい反応を示す。ハナショウブを手がけるようになり、筆者は5月の2、3週間と10月、生育期間の初めと終わりに暖かさを補充するため、ハナショウブの畝にトンネル状のフィルムをかけてきた。冬越しはピートモス、針葉樹の枝、



針葉樹の落ち葉で覆った（落ち葉はとくに望ましく、春には除去せず、株と株の間に置いたままにすることで絶好のマルチングとなり、ハナショウブに適した酸性の土壌にすることができる）。

冬越し用の覆いを施し、春と秋にはトンネルで覆い、シーズン中に水遣りや追肥の量と時期をしっかりと守れば、モスクワ郊外の条件に花菖蒲を慣れさせることができる。

第三の方法、筆者がもっとも有望な方法と考えるものは、は

じめからロシアの条件のもとで生育する新たな品種を作り出すことである。1990年代半ば、きれいだが手間のかかる花菖蒲を何とかして自分のものにしようとして、ロシア中央部でも、花卉愛好家が自分の庭で簡単に設けることのできるような簡単な冬の覆いを設けるだけで、常に露地で育つ数多くのさまざまな品種を育てようと目標を立てた。筆者はすぐに花菖蒲を鉢で育てる可能性を否定した。ロシアの多くの園芸愛好家には困難な方法だからである。

1996年には筆者はウラジオストクのナウメンコ氏から、さまざまな品種が自然受粉して得られた種や、極東、沿海地方で育つノハナショウブの実生苗をもらった。筆者はモスクワ郊外の庭でおよそ350本の実生苗を育てることができ、そのうちのいくつかは2年目に開花、大部分は種まきから3年目で開花を見た。花菖蒲にとり最も都合のよい条件をそろえるよう工夫した。肥沃な土壌に植えつける、保水性を高めるため窪んだ植え付け場所を準備する、冬越しのため針葉樹の枝や落ち葉で覆う、5月および10月には2週間トンネル状の覆いを施し、プラスの温度の総計を増し、生育期間を長くすることができる。

1998年～2000年の間に筆者が観察を行った花菖蒲の実生はおよそ300本にのぼる。自然受粉の結果得られた実生ものの大勢（筆者の交配計画の中では第一世代F1）は形、色とも、野生のノハナショウブに近く、小ぶりの三英花で、さまざまな色

調の紫色（ときとして白やライラック色）があった。しかしその中からおよそ 20 種の別の色合いをもっていたり、別の花形をしたものを選別した。それらは別途植え替え、次のシーズンじゅう観察してみた。必ずしもすべてがモスクワ郊外の条件への安定性を示さなかったが、それでも見た目が美しく、とくに手間をかけなくても安定して毎年開花する 4 つの花菖蒲をつくることができ、筆者により国際名称登録した。ピェールヴィ・バール *Perviy Bal*、オセンニエ・ニューボ *Osennee Nebo*、オジダニエ *Ozhidanie*、ランニイ・スニエグ *Ranniy Sneg*。これらは一番最初に公式に名称登録を行ったモスクワ郊外生まれの花菖蒲である。筆者が株を



分けたほかの花弁愛好家らも、これらの品種の成育がよく、たくさん花を咲かせているという。

筆者の次なる交配計画のステップは、とくに条件を設けることなく保存し、欧州部ロシアの条件への安定度を徐々に高めるなかで、見た目と色調の多様性を高めることだった。2000 年から 2007 年にかけて、交配は上

記の品種と実生ものを用いて行った。沿海地方で採れた種の発芽後、大勢の実生はそれほど見栄えがするものではなく、表現型についていえば花は野生のノハナショウブのそれに近かったのに対し、第二世代の実生は多様性を高め、十分見ごたえのあるものが多くなった。筆者は第二世代を作る際にあたり、第一世代と同じような過保護的な条件を設けず、アルカリ度の高めの土壌で育てたり、水遣りも過度に行わず、冬越しの覆いもそこそこにとどめ、いわばスパルタ的に過酷な条件でモスクワ郊外の花菖蒲を育て上げたのである。それにもかかわらず（そのおかげで？）、勢いがよく、生命力の強い植物が現れ、3、4 年経ったいくつかの花菖蒲は高さが 1 メートル以上にも達し、20 から 30 の花茎をつけるに至った。

2000 年から 2008 年にかけて、第二世代、第三世代の実生を観察した結果、筆者の想定した交配計画にかなう、すなわち、さまざまな花菖蒲にとって不都合な夏の気象条件にも安定し、冬越しは多少の覆いで済ませ、毎年たくさんの花を咲かせ、十分見た目のよい品種が数多くできた。その結果、筆者によってさらに 20 の園芸種が国際登録された。それらは大きさの点でかなり多様で、さまざまな品種の花茎は 40 センチから 100 センチ以上にもなり、花の直径は 10 センチから 21 センチにわたる。もっとも安定して成長し開花した第二、第三世代の実生のなかで、いくつかのグループに分



けることができる。もっとも数が多いグループは、たいてい6枚の外花被が皿上に平たく広がる六英花で、明るい地に青紫や赤紫の筋がさまざまな濃さで現れる。このグループは、**Osennee Nebo**と**Perviy Bal**の第一世代の交配から生まれるもので、多くの場合、見た目の点で親を凌いでいる。たとえば、オダ・オケ **Oda Oke**などは実際のところ**Perviy Bal**の色調をすっかり繰り返しているものの、花弁のきめがより細かく、絶妙なレリーフを持っている。ザオクスキ **Zaokskiy**はとりわけ濃い、ほとんど黒いスタイルが特徴的で、ヒロマンチヤ **Hiromantia**はしばしば7~9弁の花弁を広げる。

第二のグループは、三英、六英ともにあるが、白い外花被に大きめの青い斑点と淡い青い筋が現れるものである。内花被(スタンダード)と花柱(スタイル)もときとして白から青い色調をもち、コントラストのはっきりした濃い紫のときもある。このグループの模範的なものとしては、丈が高く、育ちのよいトゥーリスキ **Tulskiy Pryanik**を挙げることができる。色あい似ているザスチェンチヴィ **Zastenchivy**は様変わりする点で面白く、ある花は三英で咲き、ある花は六英となる。ガルボイ・シェノク **Goluboy Schenok**は準矮小タイプで、40~50センチの花茎に、直径10センチほどの多数の花をつけるもので、同じく丈の低く大きくない桃色の花を咲かせるカチョーノック **Kotenok**



とペアにしてボーダー花壇用植物として有望なものとして選別された。やや垂れ咲きの三英花で、白い外花被に濃いワイン色の筋が入るものも興味深い。マロージェノエ・ス・ヴィノム **Morozhenoye s Vinom**、ウスラーダ **Uslada**。とても淡く桃色がかかったライラック色や、薄桃色のぼかしのある白い花で、開花2、3日目に、花柱がはっきりと目立つライラック色、紫色であるか、あるいはぼかし模様を残しつつ、まったく白くなる花はとても魅力にあふれている。

Electrichka、青色のプーチ・筆者が手がけ、品種登録したものとして、ニオコンチェンナヤ・ポーヴェスチ **Neokonchennaya Povest**がある。単色のものにはそれぞれの色のグループの中でもっとも安定し、装飾性の高いものがある。赤紫色のパスレードニャヤ・エレクトリチュカ **Posledniaya**

ピリグリマ **Put Piligrima**、青紫色のストラシュナヤ・スカースカ **Strashnaya Skazka**、赤ワイン色のザゼルカリエ **Zazerkaliye**。

安定性をもっとも低いのは現在のところ、桃色の品種である。筆者の唯一の登録品種は、カチョーノック **Kationok**であるが、筆者の品種の中でもっとも栽培が難しいもので、いまのところ雌蕊を使っても、オシベを使っても成功していない、すなわち結実していないのである。

上述の品種は今日、ロシア欧州部の条件に完全に適応しており、見た目のよい多くの花菖蒲のグループを生み出すための今

後の（交配）作業の遺伝学的なベースとして利用することができる。

2008年から2009年にかけてはロシアの品種、実生もの、海外品種の間での交配を行い、ペアごとにそれぞれの雌蕊とおしべを掛け合わせてみた。母系と父系の組み換えを行うことで実生苗の安定性にどう影響するかを調べるためである。2010年のシーズンではっきりしたことに、発芽率がよく、より安定した生育を見せたのは、モスクワ郊外生まれの品種を母系として使ったケースであった。この傾向は、Edance Paintbrush × Belor kyly、Rose Frappe × Tuls ky Prianik、Blushing Crimson × Zaoksky などの掛け合わせで見られた。2011年のシーズンにはこれらのグループが開花することを期待している。

2008年、筆者は清水氏[訳者注：日本花菖蒲協会理事長]から、貴重な *I.ensata*、*I.laevigata*、*I.setosa* の日本の品種の種を分けもらった。家庭用冷蔵庫の中で湿らせた砂の中で4週間おいたのち、弱酸性土をいれた箱に植え替えた。5月には *I.ensata* が発芽した。6月はじめには実生苗を屋外に植え替えた。もっとも発芽率がよく、生育がよかったのは、Musumesando × Daiou、Tanadanoshirayuki × Somabito、Satsumabushi × Hyouganotori の実生で、2010年夏、種まき後2年目にして初めての開花をみた。実生苗の花茎は高くなく（70～75センチ）、花も大きくはなかったが（14～18センチ）、それは決して注目に

値することではない。実生の初めての開花はその本来の可能性を十分に発揮しないことが常であるからだ。ロシアの欧州部（最南端部を除く）では、花菖蒲は種を蒔いてから二度目のシーズンに咲く花がより本来の様相を呈することになる。ロジオネンコ博士は、モスクワ地域においては3、4年目に花菖蒲の実生が本来の開花時期を向かえ、北西部（サンクト・ペテルブルグおよびその近郊）では4、5年目に迎えるという。もっとも花つきがよかったのは、Musumesando × Daiou（6株で開花）。すべての実生は三英花もしくは六英花で、純白の花を咲かせ、ひとつだけは10枚の花弁が皿状に平たく開いた。Tanadanoshirayuki × Somabito は4株咲き、すべてが異なっていた。そのひとつでは、3枚の外花被が白色で、縁に近づくにつれ淡くなる青紫の滲み模様をもち、内花被と花柱が赤紫色であった。花は十分大輪（直径19センチ）で、高さは80センチあった。2つの実生の花は純白だったが、ひとつは青紫の単色の花をつけ、どの花もかなり大輪（直径20センチ）の三英花であった。Satsumabushi × Hyouganotori の実生では2株で花をつけ、純粋な桃色と濃いワイン色の三英花であった。最後に、きわめてセンス良い大輪の三英花で、外花被に藤色の幅ひろいレリーフが現れ、ワイン色の内花被と花柱が出てきたのは Mokuyou × Satsumabushi の実生であった。

異常な気象条件（7月に一滴

の雨も降らず、気温が摂氏31～40度を維持）に見舞われた2010年の生育期は大変な試練であったが、水遣りを絶やさず、育成促進剤を噴霧した結果、すべての株が十分に安定した生育をみせたといえるが、やはり成長の速度は緩やかだった。

筆者は今後も実生の生育ぶりを観察し続け、新たな交配種の開花を楽しみに待っているが、筆者にとりとりわけ重要なのは日本の品種の環境適応を克服できるかにある。

今日、見栄えがよく、毎年花つきが安定している数多くのモスクワ郊外生まれの品種があり、それらをベースに（母系にして）、見た目は良いが、まだロシアに順応していない外来種を父系として受粉させ実生を作る作業はまったく問題なくなった。そのおかげで、交配、新種の選別、園芸技術のさらなる向上を数年根気よく続けられれば、モスクワ郊外において花菖蒲を順応させる課題は基本的に解決されるであろう。

ときどき筆者は自分の好きなこの花をテーマに詩をつくることがある。

庭に咲く 花菖蒲はや
やまと歌